やまかはのはやのあはをもきえてひろふかひなきはしやつゆ

鵜

進みゆく小瀬もとゝろく小原野の里よりうへにすゝむ

やまかはのをと

右爲忠朝臣家集以村井敬義本書寫一校了　部立等不審姑從舊貫

式部大輔菅原在良朝臣集

花落蓋衣

散りかゝる花をもひとしれはしはしはかさね袖乃匂ひ哉

花影浮水

水のおもに花やとまるとみるからに春のなかはの影のそこにうつりて

三月盡夜

春のたちくれゆく通路をさそふらしともよしの花を待

夜於禮秘書閣同詠雨中早苗和歌

かくはかりさみたにふらる五月雨にいそくたこの早苗とるらん

夜深待郭公

子規まつとせしまにねしまちぬる月をたのむ空にて曉ね待

山家郭公

都人まつらんものを山里にて聞ぬるかひもなきにしも宿の

館暁首涼

いかさ秋ともいはんくさむらの露にはしもぬ秋乃風のたちまち

山家早秋

やま里は人もきぬまの荻の葉をや吹く風のおとにも秋ぞしらるる

七夕

さよ深くあふせをまちぬる衣手に逢ひ見ぬほどのなみだなりけり

同

天河わたしぬる人もまたはれわたらむともへしらてかへる秋霧

月前擣衣

月影に秋はさむる砧の音ぞたれかまちえぬ夜はのころもを

九月十三夜對月惜秋

つきぬめる今宵ばかりの月を見てなほ惜しまるる秋の空かな

月契千秋

以後よりも月みぬる千たびの秋ぞいく秋のちぎりもみえたらへは

月照紅葉

よるさへも錦とみゆる紅葉かな月も照らすみよしのの秋

翫月對菊

しら菊の花のさかりをおくしもにまよひぬるかなけさのはつしも

秋夜陪吏部大王文章詠燭暁聞興

ともしびの光の床のもしほ火は八重にかさねて明かしぬるかな

秋日旅遊昭ちに詠野径尋花

めづらしき花みる野べのむすびつゝみちとをからぬ旅にしあれば

九月十三夜詠翫夜見月

名にたかきこよひの月をながむればいくたびかはるあきの夜の空

歌は江葉山ち

おりにあへるもみぢのいろにくらぶれば江の葉はさぞなうつろひにけり

初冬旅羽林藤京沢将文詠懐秋對菓

なにはがた秋のなごりの小萩さへ葉ぞうつろひて色のかはれる

山路晴雨

山路にはしぐれのあとのはれぬれば月にぞいそぐたびのゆくすゑ

夜思明鳴

うたゝねの夢のうちにもわすれねば山のかひよりきこゆなりけり

寒慢寒字

おもひやれ冬のよすがらねざめして月のかつらもとほくなる身を

梅花尋愛

梅花は人のすぎゆく小倉山花のちりしく里のかきほに

寄梅花恋

諸ともにちぎりし人を恋ひてこそ身の衣かへしけり

鼓事部大王令通越女御間為其媒介而女

未成配偶之禮王忽催君別之戀女依一首被

授其祠田

ときはなる花の色にはかはらねど萩のうへにぞ露ぞ置ける

右以戀君之趣更綴著女之祠

ゐまはのく小萩か末にあひけりむかしはたゞ人の露を置くらん

法華經神力品

こゝろをしはらふかたなき我のみしもせはひとへにかけりけるかな

松樹經池水

君ゆく道は雲ゐにて池よりまさる世のなかは八重にぞありける

松樹繁遊集

うき時はれはれ来ともなく我があるにそ世もあまたつの君がよはひに

春日にて居る

紫のつまをへだてゝまたぬ秋ぞなく雪を紫の社にぞおもふ

松樹繁遊集

いくちとせ契りおきし我が齢の年にまかせて君が代の稀を

夜日於古武將軍　小野別業詠池水久澄

和歌

池水もひやかなる世をまかせて人が来ぬとまで君が代ぞふる

右在良朝臣集雖多不審依無類本不能校合

藤原基俊家集上

正月朔日女のもとにつかはしける

梅こそにおもひまされる戀しさよまつうちとけよかほりなりとも

同し一日よる梅かをる女のもとにつかはし侍り

清つきなしたる

初春こゝろをよみてあめつちの神もろともに君かちよをいはゝ

祝ありてめつらしき梅かえなれる女にさく

清うなしたれ

老鶯

としをへてひさしき鶯のわすれぬ声をきくそ見えける

七日わかなを人のもとにつかはしける